

岡山県大学図書館協議会令和元年度研修会 講演内容概要

日 時 令和元年 11 月 27 日（水）

場 所 就実大学・就実短期大学図書館 5 階 AV ホール

テーマ 「大学図書館における障がい者対応」

講 師 小坂美鶴先生（川崎医療福祉大学）

演題「発達障害の多様性と図書館での対応」

講 師 川崎千加先生（ノートルダム清心女子大学）

演題「大学図書館における LL ブック利活用の可能性」

講演 小坂美鶴先生

はじめに ～障害の“害”の表記について～

研修会のテーマの“がい”はひらがなですが、演題の“害”は漢字で表記しています。これは医学的な診断名としては“害”を使用するからです。ここでは“害”を使わせていただきます。

（1）図書館での問題行動の実際 アンケートから考える

- ・他者への迷惑行動と、それに対する気づきがない行動。例）注意してもやめない。約束が守れない。
- ・他者へ無関心で無目的に見える行動。例）独り言。大声を出す。
- ・ルールを守れない。
- ・会話が成立しない。他者の言葉の意図が分からない。

（2）障害の種類と定義 障害を知る ～目に見える障害と見えない障害～

目に見える障害は対応しやすいが、目に見えない障害は対応しにくい。アンケートのようなアブノーマルな行動に繋がる。大学でも年々、障害学生が増加傾向にある。障害学生が多数いるという目を持つことが大切である。

◆自閉症スペクトラム障害（アメリカ精神医学会の診断分類）

[症状]

- ・相互の対人的、情緒的関係の欠落：異常な近づき方（対応：「何cm距離をとる」と明確に教える。）
- ・興味、情動や感情を共有できない：笑ってはいけないところで笑う。
- ・非言語的コミュニケーション行動を用いることの欠陥：さよならと手を振ると、おいでと勘違いする。
- ・まとまりの悪い話し方
- ・アイコンタクトが不自然：目線がどこを向いているのか分からない。
- ・人間関係を発展させ、維持し、それを理解することの欠陥：親切にしてくれた相手が、自分を好きだと思い込む。
- ・身体の反復的行動：爪をずっと噛む。
- ・同一性への固執、習慣への頑ななこだわり：こだわりが強く、考えを変えることが難しい。
- ・感覚刺激に対する過敏さ、鈍感さ：大きな音がすると耳を塞ぐ。火傷に気づかない。

(対応) 環境を整備してあげることが必要

環境が悪いと、学習、人間関係、転職、離婚など、様々な場面で本人が困ることになる。また、引きこもりや暴力、犯罪を犯す可能性が高くなる。そこで環境を整備する必要がある。

※環境とは人間関係である。

◆コミュニケーション障害 社会的コミュニケーション症

[症状]

- ・推論、推測、曖昧な言葉、慣用句、ユーモアなど、明確に示されていないことは分からない。
- ・年齢差を考慮しない話し方。適切な言葉遣いが難しい。
- ・聞き手を意識しない話し方。聞き手の注意を得ないで、自分だけの話をする。
- ・身振りが乏しい。
- ・ロボットみたいな日本語らしさに欠けているイントネーション。
- ・表情がない。(その場の雰囲気に合わせて表情を変えることが難しい)
- ・不適切な話者交替(話しかけると、自分の話が最初になり、自分の話をしたら去る。)

(対応) あいまいな言葉や隠れた意味が分かりにくいいため、明確に伝える。

◆注意欠如・多動性障害

注意欠如

[症状]

- ・集中せず、注意がよそを向くので指示に従えない。
- ・順序立てて計画的にできない。
- ・目の前の作業が困難だと思えば、途中でやめてしまう。
- ・紛失や、忘れ物が多い。

多動性障害

[症状]

- ・手足をそわそわ動かしたり、椅子の上でもじもじする。
- ・着席が求められる場所でも、席を離れる。
- ・走り回るなど、静かに遊べない。
- ・喋りすぎる。
- ・本人が周囲から抑圧されていると感じると、切れやすく、自己中心的に見える時もある。
- ・攻撃性、乱暴な行動をとることもある。

◆学習障害 (LD) (文科省の定義)

聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しく困難を示す。知的障害ではない。

ディスレクシア (Dyslexia) (学習障害の中の1つ)

[症状]

- ・LDの中で発達性読み書き障害が8割を占める。
- ・目が見えないのではなく、認知ができない。
- ・模写は文字が拙劣、読書は読んでいる箇所を見失う。ひらがなの「ろ」と「る」のような似ている字がごちゃごちゃになる。

[問題] ディスレクシアは学生時代はかなり苦勞する。学業不振による、いじめ、転校など。

(3) 図書館での様子 実際に学生はどこで困るのか

困る可能性がある箇所

背ラベル、掲示、書架の見出し：英語（大文字、小文字）、字体の違い、類似した文字の弁別
館内配置図：空間を平面で表し、文字の記載もある。

(4) 図書館での支援の提案 ケースバイケースで考える

1) 物理的工夫

規則正しい配置の表示の見直し

ルールの教示の見直し

ラベルの文字を拡大、行の間隔、文字間の間隔を広げる

2) 行動障害への支援

きちんと明示、書いて（順序立てて箇条書き）説明する。（距離も何メートルと示す。[自閉症]）

大声を出す場合は、「小さい声で話す！」「ここでは声を出さない！」と明確に言う。

本の戻し方は、「本は縦にして本棚にしまう」と書いたメモを渡したり、字や写真で明示する。

3) 注意する場合

否定的な表現はしない。「こうしなさい！」ではなく、「こうします！」のような表現を使う。

(5) 最後に

障害は、同じ特性をもっているとしても全然違う行動になる。年代でそれぞれの困り感がある。ケースをきちんと見て、個人にあった対応が求められる。

発達障害は環境が良ければスムーズにいく。環境が悪いと、戸惑ったり、パニックを引き起こす。図書館で目立つ行動をする学生は、うまく社会に適応できないリスクを抱えている。これは学生自身が困ることである。そのために、大学全体で情報共有し、学生対応をする必要がある。図書館でそういう学生を見つけたら、学科の先生に相談しながら、話し合っていくことが大切である。

以上

講演 川崎千加先生

I. LL ブックの概要

LL ブック…やさしくて分かりやすい本（スウェーデン語の Lättläst の略）

LL ブックのロゴ…写真版 LL ブック制作時に作成。表紙にロゴをつける。

1) LL ブック成立の経緯

1960 年代に広まったノーマライゼーションの理念が基になる。

障害の有無にかかわらず、人は同じ権利を有する。読書も一つの権利であり、誰もが本を読み、情報を得たり、読書を楽しむ権利があるという発想から生まれた。

1989 年、スウェーデンで LL 協会が設立。誰もがやさしく読みやすい本を作るということで、政府から助成を受け、年間 30 冊の LL ブックを出版。現在は、MTM に引き継がれる。

*スウェーデンが LL ブックに力をいれた理由

背景に移民の増加があった。必要な情報を届けるため、読みやすく分かりやすいことが目指された。

現在日本も多文化の社会になってきているため、この考え方は、まさにこれから求められる。

2) LL ブックの読者対象者

移民、知的障害、学習障害、認知症、上肢障害、文字を読むことに困難がある人（プリント・ディスアビリティ）、自閉症、高齢者など幅広い。

3) LL ブックの特徴

やさしくて、わかりやすい。

イラストや写真を多用。

写真やイラスト、ピクトグラム、ルビのあるなしなど、多様。

LL ブックはこうあるべきという明確な定義はない。

- ・『山頂にむかって』…写真と文章、ピクトグラムを使用。
- ・『美しくなりたいあなたへ』…イラストヴァージョン（分かりやすく単純化したイラスト）
- ・「料理本」…料理の手順を写真だけで説明。写真は非常に綺麗なものを使用。
- ・「ようこそとしょかんへ」（利用案内）…短い文章で完結。わかち書き、行間や文字の間隔は広め。
- ・「大阪市立中央図書館 HP やさしいにほんご」の頁…

漢字はひらがなで表記する。英語（DVD 等）にカタカナのふりがなをふる。

ただし、多文化サービスや LL ブックは、カタカナにひらがなのルビをふる。

〔理由〕日本語を習う際、最初にひらがなを習うため、カタカナは難しい。

4)LL ブックで目指すもの

中高生以上、知的障害のある成人でも楽しめる本。障害の有無にかかわらず、成長に合わせ、年齢に応じたものを扱ったもの、その時の関心や興味をもって読めるもの。

II. LL ブックの制作の過程

1)川崎先生が LL ブックと関わったきっかけ

2009 年の日本図書館研究会の図書館学セミナーで、藤澤和子氏（大和大学教授）に出会ったことが始まり。この頃、国内には LL ブックはほとんどなく、藤澤氏が、日本版 LL ブック作成を望んでいた。大阪芸術大学図書館の多賀谷律也子氏と友人であった川崎先生が、大阪芸大には写真科もあり、LL ブックを作れるのではないかと提案した。

2011 年『はつ恋』出版

日本コミュニケーション障害学会の LL ブック。学会の助成金で制作したため市販はできなかった。

2013 年『わたしのかぞく LL 写真ブック』出版

助成金で 30 冊を制作。

2015 年『わたしのかぞく なにが起こるかな?』出版

助成金の額が大きく、また樹村房からの支援を受け、初めて一般流通にのる形で LL ブックを制作。

〈川崎先生の思い〉

『はつ恋』、『わたしのかぞく なにが起こるかな?』、『旅行にいこう!』と現在樹村房から 3 冊出版しており、5 冊まではこの形を続ける。5 冊同じような本があれば、書店に並べてもらえるかと期待している。

写真による LL ブックのこだわり

・写真による 4 コマ漫画風

4 コマであることが大切。長くても 6 コマ。長くなると最初と最後の繋がりが分からなくなるため。写真は、人の表情をできる限り大きく分かるようにする。背景になるものはできるだけ除外する。視点をずらさないために固定のカメラ位置で撮る。

・写真はモノクロ

写真がモノクロなのは、余計なものを取り除くことと、視点を焦点づける必要があるため。色があると、自分の好きな色に集中したり、目がいってしまう。

・装丁

頑丈に制作。乱暴に扱われる場合があるため。

- ・贅沢な作り

写真は本の右頁のみに載せる。左右両方の頁に写真を載せると視点が動いてしまいどこを見るかわからなくなるため、写真は右頁のみにしている。

2) 目指す LL ブック

誰もがクスッと笑えるもの。

文字を読めなくても、笑える本があることは、もっと本を読みたい、他に面白い本がないかなど、読書の興味や関心、読む楽しさに繋がっていく。誰もが手に取って、写真集としても楽しんでもらえるようなものを作りたい。

3) LL ブックで難しいこと

多くの人に経験がある、そして笑えるものを探し、制作すること。

私達が分かるから面白いと思うことでも、経験が少ない方には分からない。笑うためには、何が分かって何が分からないのか、どういうことは認知できて、どういうことは認知できないのかを追及していく。分かりやすさというものが、一体何なのか、ずっと格闘している。まさに認知がテーマである。

Ⅲ. 大学図書館での LL ブックの活用

(1) LL ブックは素材として、様々な場面で活用可能

- ・福祉系や児童学科の学生

福祉系の学生は授業で高齢者の方と LL ブックを見て話をする、児童学科の学生は子どもと LL ブックを使って話をするなど、演習や実習で使用。

- ・文学分野の学生

写真から状況や人の感情を文章で表現するための素材として使用。

- ・認知心理学

写真を見て、何が分かるのか、何が分からないのか、どういうことが分かりにくいのか、というデータをとる材料として使用。

- ・癒し系の要素

保健室やブラウジング・ルームのような学生がくつろぐ場所に置く。

一緒に読むことで、コミュニケーションを活性化する。一緒に読まなくても、手に取ってみることで、クスッと笑えたり、和むことがある。気分が辛い時に見ると安心する効果がある。

(2) 課題

知的障害の様々なレベルに応じた多様な LL ブックが、日本では非常に少ない。LL ブックといわれるも

のは、国内で 30 冊程度。部数も少なく、市販の一般流通にのらないため、当然所蔵する図書館も少ない。そのため、LL ブックの存在を知らない、あるいは知らせることができない。

特に当事者に届けることは難しい。活字を読むことに困難がある人は、図書館を自分達の行き場ではないと思う人が多い。図書館に LL ブックや、DAISY 図書があることを知らない、図書館に行くとお金をとられると思っている人もいる。図書館はそういう人達を対象にしている場だということをどう伝えていけばいいのか、本来利用する権利のある、潜在的な利用者への働きかけが必要である。

(3)購入方法

LL ブックの要素を備える本のリストは、近畿視情協を参照。LL ブックの要素を兼ねているような本も含めると、国内では 60 冊程度ある。

*大学図書館であれば、スウェーデンから LL ブックを取り寄せてはどうか。スウェーデンの LL ブックはクオリティが高く、多種多様なものがある。

IV. 障害者差別解消法と読書バリアフリー法の概要

1)2016 年 4 月 障害者差別解消法が施行

基本的人権が保障される社会の実現に向けて、障害を理由とする差別を解消していくことが、この法律の主眼。日本学生支援機構の「合理的配慮ハンドブック」には障害者差別解消法から合理的配慮への流れ、合理的配慮の解釈の仕方など詳しく記載されている。これには障害のある学生を教えるときに、その学生の困り感やニーズを丁寧に聴き取る人が必要で、それによって、自分で必要な支援を決められるように支援をすることが重要だとして。また、合理的配慮は、教育の目的や内容、評価の本質を変えない範囲ということで、ここに関わらない理由づけ(予算がない、人がいない)は、合理的配慮に入らないとしている。

2)著作権法の改正

図書館が障害のある人に対し、電子書籍化や録音図書を作ることが、著作者の許諾なく可能となる。

3)2019 年 6 月 読書バリアフリー法が施行

視覚障害者と障害のある人に対しての読書環境を整備するために作られた法律。情報アクセスバリエーションの保証をより具体化していく法律。主眼は電子書籍の普及を国や地方自治体の責務にし、責任を明確化したことにある。電子書籍化は読書の障害に対応できるようになった。電子書籍は音声を読み上げたり、紙の頁がめくれない上肢障害の人も、ちょっとした動作で頁をめくれる。これをもっと推進、普及させるための法律である。

大学図書館の取り組み…学習のための資料の電子化

プリントディスプレイバリエーションの障害がある学生が、図書館に相談をし、自分が読みたい書籍を電子化。

(新潟大学附属図書館、東京大学)

4)取り組みに向けて必要なこと

障害のある学生の困り感やニーズを丁寧に聞き取れる人が必要である。人が削減され忙しい状況にあるが、大学全体として合理的配慮を考えたときに、一人ひとりの多様な障害や障害となることに対してどう対応していくか考えると、個人のニーズを聞き取れる人を配置することが必要である。そのためにも他部署との連携や大学全体での取り組みが欠かせないものである。また、情報がしっかり共有できる環境整備も必要である。ただ現在、個人情報やプライバシーの問題で、障害学生の情報も一部の人のみが知り、他部署には知らされないこともある。学生が学習していく、研究していく中で必ず利用する図書館には、正確な情報が共有されるべきであり、ニーズを丁寧に聴き取れる人を配置することが、今後求められていく。

V. まとめ

読書を楽しみたい思いは誰もが一緒である。人の感情を読み取ることが苦手な人も、活字をじっくり読むことが辛い人もいるかもしれない。学習のための本は電子化してくれるが、自分が楽しむのために読む本もやはり大学図書館にはあるといい。そういう意味でLLブックが、楽しむのための読書の保証に繋がっていけば有難い。

以上

質疑応答 小坂美鶴先生

質問1

本学では配慮の必要な学生は届を出す制度があり、その制度を利用する学生は対応の余地があるが、親御様が、自分の子は普通だし、特別な配慮は絶対しないしてほしいと仰る方もいる。傍から見ると、明らかに発達障害であろうと思われる。その場合の対処法を知りたい。

小坂先生

親御さんの問題はどこでもあります。幼少期から問題があると思います。私は早期発見早期介入、そして継続的支援が大切だと思っています。私は保育園でも相談を受けることがあります。園では問題視しても、お母さんは絶対に認めません。発達障害だと分かると、お母さんが大変です。保育園に通うお子さんのお母さんは働いていますから、これから病院や療育に行ったりするのが大変です。家では大丈夫だと言われます。ですが、家の環境と他所の環境は違います。環境で変わってくるわけですから、園での様子を説明しても、分からない。先生の対応が悪いと言われたりします。私は言語の専門家です。で、専門家として、お母さんに説明してくださいと保育園に言われます。それでお母さんが来るという日に行っても来なかったりします。やはり我が子のことは認めたくないのが多いです。ですが、後々大変なことになることを周囲は心配します。

お母さんは保育園から小、中、高校までずっと否定してきたと思います。大学に入って急に大変ということはおかしい。よっぽど大学の環境が悪いということになりますが、そんなことはありえないわけ

です。頑張って大学に入ったのに、という思いがお母さんにはあるわけですから、専門家やドクターが言っても難しい。その学生はどう思っているのでしょうか？

参加者

自分は特にそう思っていないと思います。ただ、話をしていると、突然話の内容が変わったり、すごくマイペースです。ですので、先生も学生を図書館に連れてきて、図書館実習させてください、ということもあります。外に出せないからです。

小坂先生

就職しても、問題が起こって、すぐ離職してしまうとか、そういうことが続くと思います。ですから、親御さんの理解が絶対に必要ですが、理解が得られない場合は、お母さんには言わず、先生方だけでも対応するしかないのかなと思います。親御さんは本当に難しいです。人権問題になってきてしまいます。専門家に伝えてもらうとか、あるいは家庭がどういう家庭なのかとか、お父さんもおられるわけですから、そういうことも聞きながら、誰にどう話をしたらうまくいくか考えます。大学だけではなくて、民生委員とか、地域も巻き込んで良い環境にしていくことが大切だと思います。

その子の支援というのは、先生や図書館、みんなで行うというのが、適切な配慮をすることで、大事なことではないでしょうか。お母さんが分かってくれないなら、お母さんには言わないで配慮することも正しいやり方だと思います。その子の自立のためにも、配慮して、その子に教えていきながら、その子なりに育って自立できるような支援は、周りの大人や、所属している大学がきちんとしていく必要があることだと思います。卒後教育も含めて、そうではないでしょうか。

質問2

発達障害の人が自分の症状をどう認識しているのかを知りたい。例えば、ディスレクシアの人は、普通は文書を読んだら頭に入って理解できるが、自分は理解できないと、ディスレクシアがどんなものか理解できている。では、発達障害の人は自分が抽象的な指示が分からないとか、普通の人はこうだけど、自分はこうだということが認識できるか疑問です。

小坂先生

できないと思います。新聞に、結婚したが離婚し、仕事も辞めて、たくさんの失敗をしてから、自分はどうもおかしいということで、40歳になって初めて精神科に行き、診断されて納得したという記事がありました。大人になって、診断してもらい、やっと自分のことがわかったという形です。診断されない限りは、失敗の原因は分からないみたいです。

人にはADHD的なところや自閉症的なところは少しはあります。一人でいる方がいいとか、仲間といる方がいいとか、すぐ考えたことをやらなければ気が済まないとか、いろいろあります。それが度を過ぎると障害になります。障害は、環境との適応が悪いということです。自分にとって害になる行動というか、自分がうまく生きていくために、どうしてもできないことが病気ということです。

ですが、病気は病気でも、環境が良くて適応していると、それは障害とはならないわけです。同じ行

動をとったとしても、片方は、うまく適応できて、結婚して、奥さんの理解がよくて、であれば、同じ状態でも障害とはならない。うまくいかない時、なんで自分はこうなんだと思う時、それは障害だと思います。他者が決めるというよりも、自分がうまくいかなかったとき、その行動が害となるかならないかということです。ADHD はアクティブで、とてもいいです。だから環境さえ良ければ、いい仕事もすごくできると思います。考えたことを実行しないと気が済まないということで、実業家で成功している人はたくさんいます。私は研究をしても、まとめるのに時間がかかり、なかなか気が乗らず、論文を書くのに長い時間がかかります。アクティブな ADHD の方は、すぐ書いて、何点も論文があります。それはいいことではないかなと思います。

質問 3

ルールや決まりを守れない、恐らく発達障害ではと思われる学生がいます。そういう方に明確に張り紙や表示をしたらよいとお話がありましたが、明確に伝えれば伝えるほど、逆切れのような対応をされることがあります。その場合どのように接したり、伝えればよいのでしょうか。「この時間までに必ず鍵を返してください」とお願いして、時間が過ぎてしまったため、「この時間までに返すと書いています」とお伝えすると、自分が間違っている、他者に何か言われることが気に食わないというか、ちょっとムツとされる方には、どう対応したらよいのでしょうか。

小坂先生

叱られたと思ったのかもしれません。叱られることは好きではありません。簡潔に「何時です。終わります。」くらいで、実力行使をしてはいかがでしょうか。クドクド言われれば言われるほど、嫌だと思います。怒られているという感じですから、反発するのではないかと思います。怒らず、注意もせず、ルールが何時から何時までですから、もう閉めます、と閉めてしまう。関われば関わるほど、丁寧に扱おうとすればするほど、ダメなのだと思います。ですので、きちっと明示するというか、もう終わりますとって終わるということです。

質問 4

発達障害の方は、例えば図書館を 1 年生から使い始めて、次第になんとか図書館のルールを理解していくものでしょうか。それとも、その都度同じようにお知らせをする必要があると思っていた方がよいのでしょうか。

小坂先生

自閉症や ADHD の学生もパターンに入ると大丈夫です。途中で変えると難しいです。4 年間ずっと同じだとパターンに入ってくるので、パターンで覚えることは得意です。それを「今日から赤に変えました」と、難しくなってしまう。ですので、パターンを変えないのであれば、その方がいいと思います。何回もやっているうちに、ここはこういうパターンなんだと分かれば、できるようになると思います。ですから、パターンは変えられません。途中で紙を貼り付けたりするのは駄目です。

質問5

本の背ラベルの表記は絶対に変えられませんか？（小坂先生より）

参加者

各図書館にある本は、全てそのようなラベルが貼られております。紐づけて管理しておりますので、かなり根幹的なことになるかと思います。ラベルを変えることは全国的に難しいです。

小坂先生

JやIやl(エル)が、非常に難しいと思います。形が似ています。完全に違う形にするとか、絶対間違えないアルファベットを使うとか。

参加者

例えば、今あるものに加えるような形で、分かりやすいシールを張り付けるとかどうでしょうか。情報が複数、本の背に並んでしまうことになってしまいますが、分かりにくいでしょうか。

小坂先生

複雑になればなるほど分かりにくいです。色を変えるのは良いと思います。ですが、そこに文字を加えると、また難しいと思うので、目で見てもパッと分かるようにしては。今の背ラベルでは、ディスレクシアの人には難しいかと思います。その人は連れていけないかもしれません。

参加者

ディスレクシアの方は個人差があると思いますが、使われる資料があれば、特別に気を遣うことができるかと思いますが、なかなか仰っていただくこともありませんので、先回りして図書館が優先して用意できることがありますか。

小坂先生

“い”と“こ”は90度逆で、回転して分かりにくいです。そういう文字や似たような文字、見にくいものは避けるとかですね。行がつかっていると、自分がどこを見ているのか分かりにくいです。濃くしてみるとかですか。その方が分かりにくいと言って来てくださればいいのですが、諦めてしまっていると難しいと思います。

質疑応答 川崎千加先生

質問1 小坂先生より

楽しむためには、経験していないことは分からないということで、分かるということが楽しみの一つであると思いますが、LLブックは、知的障害者が読者の中心と仰っていましたが、認知症や読者は様々だと思います。みんな経験も違いますし、知的障害者はより経験が狭くなってしまうこともあるので、読者をきちんと決めた本がよいのかと思います。何歳の方で、どういう経験をした方がこの本の対象ですとか、どのくらいの知的障害の方で、どのくらい経験している方がこの本の対象ですと決めないと難しいのではと思ったりしました。例えば、主人公を、A君なら、A君の本にして、A君が旅に出て、海に行って泳いだよとか、そういう形にしていくと、結構楽しめるのかなと思ったりします。読者をきちんと決めていかないと、広く楽しめるのは難しいのではないかと思いましたが、いかがでしょうか。

川崎先生

仰る通りです。読者の対象をもう少し絞った方がいいのかなと思うことも多々ありますが、一方で流通にのせるとなると、読者を限定しすぎると、なかなか広く売れないということもあり、広く楽しめるものとなっているところがあります。知的障害の方を対象にしているにしても、レベルがありますよね、どの程度の人を対象にするのか、ということは、いつも明確にはなっていません。

私達の制作過程でも、藤澤和子さんが実際に障害のある人達に写真を見てもらい、どこが分かってどこが分からないのかを聞きながら進めています。それも、ある程度理解ができる人達を対象にしていると思いますが、はっきりとしたレベル付けをしていないことは確かに課題だと思っています。

もう一つは、一人の本にした方がいいということも、確かにそうだと思います。『わたしのかぞく』も女の子をメインにしています。その女の子と家族の関わりという形で作っていますので、やはり分かりやすいようです。この次の『わたしのかぞく なにが起こるかな?』も、はっきりと女の子が色々絡んでいくということを増やしましたので、『はつ恋』に比べると分かりやすいということで、よく読まれている、売れる本になっていたりします。

質問2

私達の大学では、支援要請という制度があり、学生の方から支援の要請を受ければ、大学内で共有して、こういう学生がいると、情報がきます。今回、学習障害ということで、図書館から学生に向けている図書館便りにルビをふってほしいと依頼がきましたので、全ての漢字にルビをふって、その学生のために図書館便りを作成しました。その学生が図書館を利用するかは分からないのですが、例えば、張り紙にも、事前にルビがあった方がいいのか、悩ましいところです。現に一人在学していますが、大学なので、そこまでする必要があるのか、そういうことをした方がいいのか悩んでいます。

川崎先生

私も図書館員の時に、留学生がたくさん入ってきたので、いろいろなものにルビをふるようにしましたが、大学では幼稚だとか、大学でそんなことをする必要があるのかと、その時に言われたことはあります。ですが、ノーマライゼーションの観点から考えると、誰もが分かりやすいと思えます。日本人の学生でも、障害がなくても、実は読めない漢字があったりすることがありますので、誰にでも優しいと

考えれば、ルビをふることは、大学図書館であってもいいと思いますし、公共機関も HP はそういう取り組みが増えてきています。当たり前のこととして、あるようになってきていると思います。

質問 3

LL ブックで、テーマやタイトルを決める時には、誰もが笑えるものをと仰っていましたが、タイトルを決める時はどのように作っていくのか、具体的に教えてください。

川崎先生

私達がテーマを決める時は、藤澤和子さんが障害のある方たちに、どういう本が欲しいか調査をします。調査をして、多くの人達に関心のあるテーマから、まず作っていくことにしています。スポーツや料理、旅行とかですね。『はつ恋』を決めた時は、調査ではなく、成人や中高生でも楽しめる恋愛ものは少ないので、作りました。テーマが決まってから、本を考えていくというのが、現状です。調査に関する本は樹村房からつい最近出版されたそうです。見てみてください。

質問 4

大阪市立図書館様の「やさしいにほんご」の頁をご紹介いただきまして、全てひらがなというのもどうかと仰っておられましたが、本学の館内の掲示等は、できるものは英文併記にしています。最近英語圏以外の留学生の方も大変増えていまして、ひらがなでの表記もすぐにできますし、取り入れていきたいと思いますが、ある程度は漢字を含めてもいいのか、それともひらがなだけの方がいいのでしょうか。

川崎先生

全てひらがなにの方が、区切りが全くなくて難しいと思いますし、大学であれば、漢字にルビをふるだけで大丈夫だと思います。あとは、フォントも明朝体よりゴシック体の方が見やすいと聞いています。行間を広めにしたり、文字と文字の間の間隔を広げる方が見やすいです。

参加者

災害時等の案内に関して、進めていかないといけないと思っていますので、対応したいと思います。